

そこで今回の熊本医学・生物科学シンポジウムでは、ダブルデイグリープログラムの締結を記念しましたシンポジウムを開催しました。冒頭、安東医学教育部長が開会の辞を述べた後、がん、感染症、生活習慣病の三つのテーマで、コンケン大学ならびにマヒドン大学から各五名ずつの講演者をお招きし、ご講演いただきました。学内からも、十名の教員が講演を行いました。最後に、原田学長が閉会の辞を述べて、無事盛会のうちにシンポジウムを終了することができました。

シンポジウムには、学内外から多数の方に参加いただき活発な討議が行われました。参加いただきました

ただきました同窓の先生には誌面をお借りいたしましてお礼を申し上げます。また、本シンポジウムを開催することにより、本学の学部学生や修士学生あるいは他大学の学生に対して三大学の質の高い研究成果を紹介することができ、ダブルデイグリープ



プログラムへ関心を持っていただくことができました。さらに、三大学間でより深い交流をすることができ、大変有意義なシンポジウムとなりました。

最後になりましたが、本シンポジウムの開催にあたり、多大なご支援を賜りました肥後医育振興会の皆様にご心より御礼申し上げます。

### 平成三十年度熊大病院群卒業臨床研修プログラム研修医育成報告

熊本大学病院総合臨床研修センター長 大屋 夏生

平素より熊大病院群卒業臨床研修プログラムの研修医の指導・育成にご協力頂き、誠に有難うございます。

平成三十年度の熊大病院群のマッチ者は三二名（採用者二九名）であり、平成二十九年度の五〇名と比べて大幅に減少しました。一方、熊本県全体としての平成三十年度のマッチ者数は一〇〇名（採用者一〇五名）となり、過去最高の一三〇名を記録した平成二十九年度には及ばないものの、平成二十八年以前の水準以上に達しました。これらの数値を見比べると、熊本県全体としては安定してマッチ者数を維持できている反面、初期研修先として大学病院が敬遠されつつあるという全国的傾向は、熊本においても例外ではないと考えられます。一方で、初期臨床研修プログラムの修了後、平成三十一年四月に熊本大学病院基幹型の専

門医プログラムに採用された専攻医は一〇二名にのぼり、過去最高であった平成三十年の九五名からさらに増加しています。

このような直近わずか数年間の推移を「初期研修医の大病院離れ」「専攻医の大病院回帰」などと単純に括るのはあまりに拙速でしょうが、この数年間は、新専門医制度の定着までの過渡期であり、医学生や研修医が、自らのキャリアパスや専門医へのロードマップを強く意識するのにも当然と思われれます。上述の熊本県内の傾向もその表れの一つかもしれません。卒業研修の場を提供する側としても、研修医を取り巻くこのような状況を理解して、要望に応えていく必要があると思います。

二〇二〇年度からは臨床研修制度も大幅に変更される予定です。どのような状況にあっても、熊大病院群卒業臨床研修プログラムが、熊本県の医師育成に貢献できるように、努力してまいります。肥後医育振興会の皆様には、今後とも御支援御指導をよろしくお願い申し上げます。

### 第十八回熊本大学医学部医学科医学教育FDワークショップを開催して

熊本大学医学部医学科長

尾池 雄一

熊本大学医学部医学科医学教育FDワークショップは、医学教育に携わる大学教員の教育能力を高め、大学の組織的

改革を目的として、二〇〇〇年に第一回が開催されて以来、今年で十八回を数えることとなりました。その成果はチュートリアルでのシナリオ作成や熊本大学医学部医学科の教育成果の作成、統合卒業試験の導入や新カリキュラムでの臨床実習の充実など、現在の本学の医学教育に寄与しています。

今年度は、二〇一八年十月二十八日（日）に、熊本大学臨床医学教育研究センターにおいて開催され、教職員、研修医、学生、合計五六名が参加しました。

二〇一七年より全国の医学部・医科大学の医学教育プログラムを国際医学教育連盟（WFME）の国際基準に則り認証評価する、いわゆる医学教育分野別評価がスタートし、熊本大学は二〇一九年六月に日本医学教育認証評価評議会（JAC

